

大震災 から8年

後を絶たない自然災害

近年多発する自然災害。平成30年度を振り返ると、6月に大阪北部地震、7月に西日本豪雨、9月に北海道胆振東部地震など、いまだ記憶に新しい大きな自然災害が次々と日本各地を襲いました。

東日本大震災も、発生から早や8年。その衝撃的な被害の光景は、今



サンオーレそではま



南三陸町志津川湾



も私たちの心に生々しく刻まれています。誰もが毎年この時期になると、自然災害の恐ろしさを思い起こし、改めて日頃の備えを見直し、防災・減災意識を高めていることと思います。

大口町では、東日本大震災のあった翌年、平成24年に総務省の要請により行政機能をサポートする職員が被災地に派遣され、翌25年からは町

独自の判断で職員を派遣する支援を継続中です。初の女性派遣職員として3月に1年間の職務を果たし終えた井口まどかさんに、現地で実際に生活した体験談を伺いました。

井口さんの南三陸町での仕事内容を教えてください。

―大口町の派遣職員は日々、南三陸町教育委員会教育総務課で主に小中

学校に関する仕事をしています。

児童生徒の異動にともなう学校の手続きや、住宅が全壊や半壊になり震災の影響により収入が大きく減ってしまった家庭への学用品費や学校給食費などを支給する就学援助、特別支援教育に関する業務、スクールバスの委託業者や学校との連絡調整といった業務をおこなっています。

自分と同じように全国市町村から被災地支援のために派遣された職員は、65人（内、6人は復興庁から）勤務していました。

まだ地震は頻繁に起きていますか？ 大口町でも各地域自治組織などが災害に備え訓練をしています。南三陸町の防災訓練の様子を教えてください。

―頻繁ではありませんが、時々小さな地震はあります。

平成30年度は、11月11日(日)に、約4800人（住民約4000人と防災関係機関から約800人）が参加し、南三陸町総合防災訓練が実施されました。この訓練では、午前7時30分に降り続く大雨に伴う避難準備・高齢者等避難開始を発令した後、午前7時45分に土砂災害警戒情報の発表と避難勧告の発令、午前8時に緊

大口町は、東日本大震災発生後の平成24年4月から、大口町の人口約2万人と規模がほぼ同じ南三陸町へ毎年職員を1名派遣しています。今回の特集では、



市

東日本 発生か

平成30年4月より、8人目の派遣職員として南三陸町役場に勤務した井口まどかさんに、8年たった現在の復興の様子を伺いました。

写真提供 南三陸町



急地震速報の発表と震度6弱を観測する大地震の発生、午前8時3分には大津波警報の発表と避難指示の発令といった想定で、町内全域を対象として午前10時まで実施しました。また、訓練終了時の午前10時には、東日本大震災をはじめとした各種災害により犠牲となられた方々に哀悼の意を表し、防災行政無線による一斉サイレンの吹鳴に合わせ、黙祷がお

こなわれました。このように南三陸町では防災訓練を毎年おこなっています。また、南三陸町立歌津中学校は防災への取り組みが盛んであり世界大会に行くほど防災への意識が高いです。

井口さんが体験した、南三陸町独自の災害への備えは何かありましたか？
「公用車のガソリンは「半分になったら満タンにする」という役場内の決まりがあります。これはいつ災害が発生しても対応できるようにするためです。私も、公用車を利用する際や、普段利用している車についても心がけるようになりました。」

現在の南三陸町の復興の様子を教えてください。

「仮設住宅が撤去され、町営の復興住宅建設や高台移転による分譲住宅建設などによって新たな市街地が形成され、皆さんは震災前の生活を取り戻しつつあります。」

また、平成30年10月18日に南三陸町志津川湾がラムサール条約湿地に登録されました。志津川湾には、豊かな海藻の森（藻場）があります。国の天然記念物であるコクガンなどの水鳥の越冬場所として、また多くの生きものすみかとして重要です。さらに、農業や漁業をおこなう場所として、皆さんの暮らしを支えています。このような湿地を守りながら賢く利用し、交流・学習に役立てることも大切な目標としています。震災後「森里海ひと」のちめぐるまち南三陸」というビジョンを掲げた南三陸町は、ラムサール条約湿地への登録をきっかけとして、志津川湾の豊かな恵みを守り伝えていくことも復興の一部であると考えています。

南三陸町は、東日本大震災の津波で職員ら46人が死亡・行方不明となっています。その中でも42人が亡くなった防災対策庁舎では、私と同年代の職員も多く亡くなっています。当時の話を「聞きたくないし、話したくないし、

見たくない」「でも忘れることはできないし、忘れてはいけない」と机の奥下に当時の新聞記事をしまっている職員の方もいます。津波で信頼できる上司や大切な同僚、かけがえのない家族、思い出を流されて、8年目をむかえる南三陸町は、新しい街並み、新しい住居、新しい道路など生活環境の整備が進む中で、人と人の心をつなぐ「コミュニティ」という復興はこれからだと思います。

南三陸町で実際に生活してみているに残ったことや、大口町のみなさんに伝えたいことはありますか？

「東日本大震災の津波は、当時入居したばかりの私にはとても衝撃的でした。テレビのニュースでこの8年間で変わっていく街並みや風景を知り、現地の方は毎日一生懸命暮らしているのだなと感じていました。実際に南三陸町の隣の登米市で生活してみても、現地の方々の元気でフレンドリーな姿に心をうたれることがかりでした。自分たちの暮らしも大変だというのに、大口町としては初めての女性の派遣とあって、多くの方が気にかけてくださり、声をかけてくれます。そんな心温かい方々と

知り合えたことに感謝したいです。

予想と違って意外だったことは、南三陸町は多く雪が降って、冬は毎日雪かきが必要だと思っていたのですが、南三陸町はそんなに雪が降りません。ただ、氷点下から日中気温が上がらない日があります。そんな日は、道路も車も全て凍ってしまいます。道路が凍ってしまう「アイスバーン」はスケートリンク上を車がはしるようなものです。冬道の運転はとても危険で、そんな道路を運転したことがない私はただ驚くばかりでした。

南三陸町で毎月末に開催される「南三陸復興市」に参加して、タラやカキ、ホタテなどを堪能しました。そこで驚いたのが、南三陸町ではタラを刺身で食べるといことです。タラのあまりの美味しさに愛知県の実家にタラ一本を送るほどでした。その他にも、焼きカキや蒸しカキをその場で食べることもできました。とっても美味しいので、旅行の際はその時期をみてぜひ行ってみたいですね！

取材にて

まだ昨日のことのように思い出される、東日本大震災の凄惨な映像。あれから8年たったとは信じられないほど今もなお脳裏に焼き付いています。科学や研究が飛躍的に進んだ現代においても大地震は予知できないものであり、津波の高さや速度も正確に想定できないものであることを、全国民がまざまざと思い知りました。

自然の脅威の前では人間は無力：私たちは、東日本大震災を始めとする数々の自然災害から、改めて日頃忘れがちなの事実を確認し、謙虚な気持ちで万が一に備えなければなりません。それは、自分自身の日頃の防災の備えや訓練もさることながら、自分の地域以外で起こった際に自分は何ができるのか、どんな支援が必要とされるのかなど相互の助け合いの姿勢も含まれます。

南三陸町に復興支援で派遣された職員の皆さんが現地で肌で感じながら学んだ体験を伝え聞くことにより私たちが学べることは数知れません。派遣職員の皆さんの貴重な経験を町民全体で分かち合い、災害に強いまちを作り上げていきたいと思います。

大口町には南三陸町の宿泊助成をおこなうリフレッシュリゾート制度があります

対象施設	岩手県遠野市観光協会加盟施設 宮城県南三陸町観光協会加盟施設
助成金額	一泊のみ 2,500円 上記に合わせて航空運賃補助 2,500円 ※名古屋小牧空港発着いわて花巻空港便のみ対象。(ただし、上記対象施設をご利用時のみ) 問合せ先 生涯学習課 95-3155

